

pays des fées

pays des fées 2022 Spring/Summer Collection 「Inframince」

pays des féesの新作コレクションのテーマとなったのは「Inframince(アンフラマンズ)」。

これはマルセル・デュシャンによる造語です。デュシャンによると、アンフラマンズとは「平面からボリュームへのパサージュ」——二次元(平面)と三次元(立体)の間にあるものを指す抽象的な概念です。そもそも「infra」とはフランス語で「下の、以下の、外の」という接頭辞で、超音波や赤外線のような可視的ではない範囲を指します。さらに「mince」は「薄い」という意味の形容詞。つまり「infra-mince」とは、物理的な薄さにとどまらない薄さを指す言葉なわけです。

デュシャンはアンフラマンズについて多くを語っているわけではありませんが、「薄い紙の表と裏の中空」「タバコの煙」「コーデュロイのパンツがこすれる音」といったものを例に挙げました。不可視的なものと可視的なもの間に現れてはふっと消えてしまうような、薄くて軽い儚さを持つものをデュシャンは「アンフラマンズ」と呼んだのです。

ここに共鳴したデザイナーの朝藤りむは、強いデザインや強い表現を求められがちな世相だからこそ、あえて繊細な表現を打ち出します。繊細で、消えそうで、儚い、そんな気持ちにそっと寄り添うものをそっと存在させたいという思いが一着一着に込められています。

日本で「アンフラマンズ」に近い感覚を表現した人物として、稲垣足穂がいます。美術家の藤本由紀夫は、稲垣足穂が作品内で用いた「薄板界」という言葉がアンフラマンズに近いことを指摘しました。足穂の短編『薄い街』で表現される風変わりな都市「薄い街」では、会話がほとんどなく、文字は数学的な記号であり、人々は「何か光を包んだ少量の物質」のように存在し、食事はガス、性別の区別はまるでつきません。現実とは程遠いファンタジーな空間のように思えますが、最後に足穂は「この街は地球上に到る所にあります。ただ目下のところたいへん薄いだけです。だんだん濃くなってきましょう。」と書いています。確かめることは出来ないけれど、私たちもアンフラマンズな世界を見たことがあるのかもしれませんが。見逃してしまうくらいの一瞬、現実の斜め隙間あたりに現れていたのかもしれないのです。

今回のコレクションでは、稲垣足穂の作品に宿る幻想的な気配が見事にビジュアライズされています。テキスタイルのコラージュは、足穂の装丁を何冊も手掛けたコラージュアーティストQ-TA によるもの。透けのある両面プリントのプリーツ生地を見ると、表裏で少し違う世界が表現されています。表にいる人物は天体望遠鏡を覗いていて、その裏には望遠鏡が見つめる先にいるような人物がプリントされています。プリーツの広がりによって重なる世界、そして、プリーツが閉じた一瞬だけ見ることが出来る世界。こうしたさまざまな仕掛けによって現実に立ち起こるアンフラマンズは、美術でも文学でもなく、ファッションでこそ得られる感覚でしょう。

マルセル・デュシャンと稲垣足穂の「アンフラマンズ」な感覚と、アヴァンギャルドでガーリーでストリートなpays des féesらしさが融合した新たな世界をお楽しみください。